天城遺産

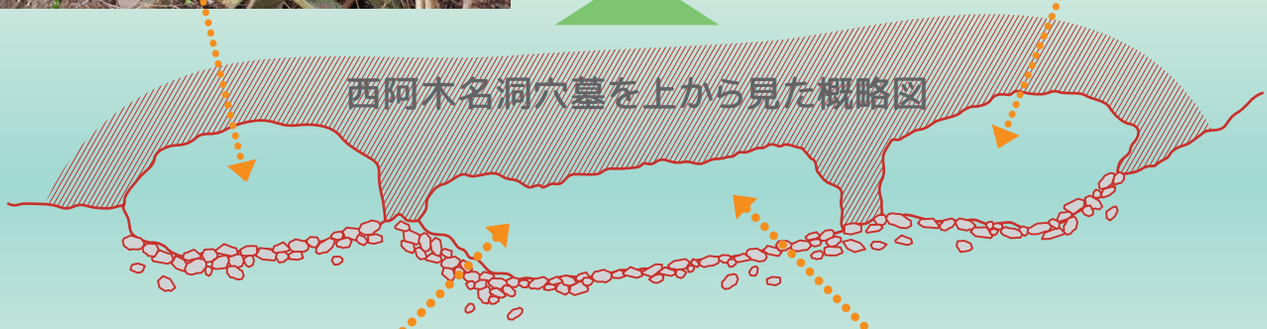
Histrical / Natural heritage in Amagi town

シリーズ天城遺産　その３０

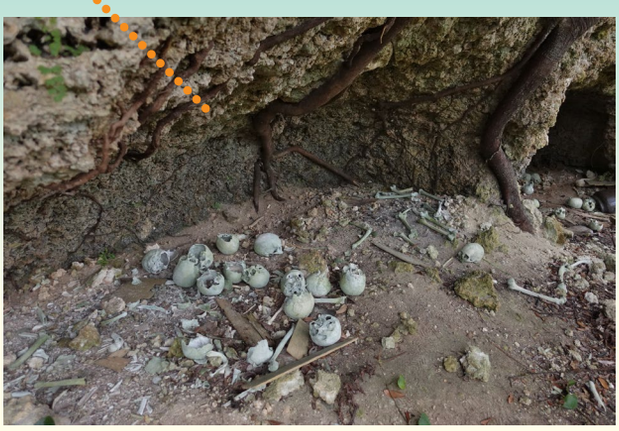
風葬のあとで骨を洗って再葬
徳之島のトゥール墓

徳之島の各地に、石灰岩の天然の岩陰や断崖を掘りこんだところに、今も多くの人骨が安置されています。これらは、いわゆるトゥール墓と呼ばれるもので、主に江戸時代に風葬とよばれる方法で遺体が葬られ、白骨化したあとに、その骨を水や酒で洗い蔵骨器に納め直す「**洗骨再葬**」が行われた場所です。考古学では、このような岩陰や崖面を墓地として利用したものを、崖葬墓（がいそうぼ）と呼びます。奄美大島、徳之島、沖永良部島ではトゥール、トフルなどと呼ばれ、喜界島ではムヤ、与論島ではジシ、ギシと呼ばれています。沖縄県域ではフィンチャー墓などと呼ばれ、八重山諸島に至る地域まで崖葬墓が確認でき、台湾やフィリピン、インドネシアといった東アジアを越えて東南アジア地域にも、似た崖葬墓が存在します。幕末の薩摩藩士が残した南島雑話には、トゥール墓について「戸保呂（トホロ）」と称し、その内部に遺体を安置して、３年目に骨洗として焼酎にて骨を洗い、壷に納めると記述されています。ちなみに、一度、葬った遺体を、白骨化したあとに再度、手をかけ洗骨して、改めて蔵骨器などに入れなおす洗骨再葬の習俗は、江戸時代以降では奄美・沖縄地域にしか見られません。

集落側（西）



海側（西）



※写真は令和5年3月の調査で撮影

明治10年（1877年）には、鹿児島県庁から沖永良部島の官吏（役人）に「死者は速やかに埋葬することに改めるように」との論達が下されています。その隣にある徳之島でも、似た状況にあったと思われ、この論達のあと、風葬から土葬へと段階的に葬法が変わっていったようです（与論島などでは、風葬を禁止するため、警察による取り締まりがあったとの伝承もあります）。一方で、現在の徳之島に見られる石塔の墓のなかには、早くも江戸時代後半の石塔の墓が確認できるので、役人層などの鹿児島本土と往来する人々は、先がけて石塔の墓を取り入れ、土葬していた可能性があります。しかしながら、土葬へと変わっても、洗骨再葬の習俗は引き継がれ、土葬後の何年か経過した後に埋葬された骨を掘り返して洗骨が行われ、その骨は壺などの蔵骨器に納められ石塔の裏に安置されてる様子が今でも見られます。徳之島では、昭和42年（1967年）に火葬場ができると、それまでの土葬から火葬へと一気に転換したため、今では洗骨再葬が行われることは、ほとんどなくなっています。

もっと情報が見られる
電子版はこちら

※トゥール墓は、町内の崖などに今も残っていますが、むやみに立ち入らないようにしましょう。

協力：伊仙町教育委員会、徳之島町教育委員会　編集：天城町教育委員会 具志堅亮、山田文彦